

# 魔斬姫伝

退魔師たちの  
淫獄

小説 綾守竜樹

挿絵 ここのき奈緒

立ち読み版

第3章	第2章	第1章	序章
積み沸し	小割り	水圧し	玉鋼

## 登場人物紹介

Characters



たかしろ やくも

**鷹城 八雲**

日本を古来よりオカルト的に守護してきた組織「神器省」に所属する退魔師。斬魔刀使い。人知れず魔を狩る役目を持つ。元軍人。

みつぎ しのぶ

**御剣 忍**

「神器省」にて課長を務める退魔師で、八雲の上司にあたる。名家の令嬢。

おがさわら みき

**小笠原 美貴**

「神器省」に所属する中堅退魔師。

「斬魔刀と婚えるのは、同じ魂鋼を秘めた女性……どのような苦境にあつても、自らを刃毀れさせぬ女だけですから」

「でも、毀れぬ刀は折れやすいのですよね」

「……………」

「懐かしいですねえ、御劔家のご令嬢？」

「……………うあ……………ああ……………」

「失礼しました、続けてください」

「……か、彼女は、それまで淫魔の存在すら知らない一般人でしたから、これは驚嘆に値する強さです。神器省からスカウトされると、彼女はすぐ入門しました。10年は要する修行を1年で終えて、斬魔刀『鬼哭丸』を拝刀」

「鬼哭丸ですって！」目尻に不敵な笑みをたたえて、「へえ……………あの『服わぬ刀』が、彼女を帯刀者として認めたのですか」

「紅薙姫としては、およそ一〇〇年ぶりの快挙です。御巫家の涼皇様を媒酌人として、沸き出米稲妻の日を選び刀婚。2年前から淫魔狩りに……………あつ！」

双乳を持ちあげていた指がニユルリと伸び、ブラジャーのなかまで潜りこんできた。小ぶりなわりにふくよかな紡錘が縊りあげられ、鏡餅の輪郭に歪められる。忍のしっとりした乳肌に、青い筋が浮かびあがる。

「んあつ！ んっ！ んあつ、あつ！」

「忍さん。いやらしい声ばかり出してないで、報告を続けてください……ここでのがんばり次第で、今日のご褒美が決まりますよ？」

「んあつ、は、はい！」

ご褒美。今の忍は、その言葉を聞くだけで甘いときめきに襲われる。胸の奥に甘い霏がかかり、腰の裏がたまらなく疼いてしまう。

「に、2年前から……んっ、淫魔狩りに就いて……んあつ、ば、抜群の実績を……あ、挙げています……」

「なるほどねえ……それで『復讐鬼』なんて、物騒なアダ名が付けられたわけですか」

「……ただ、一般人を巻きこむ……ことが多くて、んう、何度か……嚴重注意を受けていま……んーっ！」

夜空に響く叫びを無視して、影公爵は調教されきった双乳をまさぐり抜いた。肉の丘ぜんたいに粘液を塗りつけて、乳肌を淫靡にてからせる。段に割れた肉を揉みこみ、まるでパン生地を相手取っているかのごとくこねくり返す。

「……んーっ、んーっ！」

乳肉から湧きおこる快美に、女課長は目を白黒させていた。何度も腰を落としかけ、そのつど奥歯を噛みしめては立ちなおす。ご褒美をもらうには、今夜も人外の悦楽で狂わせってもらうには、ここで頹れるわけにはいかないのだ。影公爵が満足するまで、部下の秘密を売らなければならない。

「一般人を巻きこむ？ もう少し詳しく教えてください」

「んうう……うあ、あ……さ、最近、相手が淫魔だと知っていても……んっ、気にせず身をゆ、ゆだねる女性が……あっ！ ふ、増えています……」

「忍さんみたいに、ですか？」

うしろめたさを突かれて、裏切り行為を働いている女は凍りついた。

その反応を予測していたように、影公爵が乳の縊りあげを激しくしてくる。付け根の巻きつきが、熱っぽくなった脂肪を乳頭に送りこんでくる。尖端のそれが、迫力の増した量感を揺すぶってくる。双乳がひとまわり以上も膨らみ、腫れ物に仕立てられた。

「んうっ！ うっ、んあ！ あっあっあっ！」

「失礼しました。さあ、続けてください」

これが影公爵の手口なのだ。

「ああ……ああ……」

わざとヒドいことを言っつて忍を追いつめ、その直後にいつその愛撫を加える。心の苦しさを、肉の悦びで忘れさせようとする。忍が影公爵とのセックスへ逃げていくように、セックスの快楽を求めてしまうように、あらゆる機会を捉えて罠に落とすのだ。

何度も陥落させられてきた女は、負け犬の目尻をわななかせながら、改めて屈伏と快楽の結びつきを強められていた。

「……んああ……あ、相手が淫魔だと知っても……性交に及んでいた……女性たちにつ、

んっ！ ……か、彼女は……暴行を加えた……ことがあるのです……」

青年の外観をした淫魔が、少し目を見開いた。つぶらな瞳はまったき黒で、虹彩すらうかがえなかつた。光を吸いこむだけの闇がクルリと回転して、

「へえ、なるほどね」

「……同じ姫として……んあっ、きつ、気持ちわからなくもなっ……んーっ！」

肌とのコントラストが映えるブラジャーのしたで、指の尖端がゆるゆると円を描き始める。名ばかりの下着に隠された乳暈が、ナメクジの歩みで擦りまわされる。

「んあっ、ああっ！ あっあっあっ！」

ゾクゾクするような快感が、やや縦長でタマゴ形をした粘膜に滲みてくる。胸ぜんたいが熱く疼き、首筋に痺れが走った。腰に力を入れられなくなり、忍は上半身を指の縄に預けていた。元より無理をきかせていたブラジャーが、ホックをバチン、と弾きとばす。カップの連結がくす玉みたいに割れて、生白い肉塊がこぼれ出た。

「あああっ、だめっ！ こ、こんなところっ！」

満天の星のした、光の洪水のうえ。視線を遮る壁も、嬌声をはね返す屋根もないビルの屋上だ。街いちばんの高さとはいえ、目視できない場所ではない。誰かが、どこかで見ているかもしれない。自分の恥ずかしい姿を見て、発情しているかもしれない。

「こ、こんなところで……ああ、こんなところにするなんて……」

「待ちあわせ場所を告げられたときから、すでに覚悟していたんでしょ？」

「……………」

「だからこそ、待っているときから淫らな気を振りまいていたんでしよう？　その股からいやらしい匂いをたれ流していたんでしよう？」

「……ヒドい……ご主人さまは、わざと遅刻されたんですね……そして眺めていらしたんですね……忍を……あああ、牝犬の物欲しげな様子を……」

「眺めるも何も、私は人の情欲に潜む影です。いつも忍さんのそばにいます」

「……忍は……忍はもう、逃げられないんですね……」

「その通りです。あんなに腰を振って、艶かしい吐息をついて……このあたりを根城にしているヤツらが、何匹も指をくわえていましたよ」

淫魔たちに視姦されていたと知らされて、女課長の脳髓が震える。うなじが、獯猛なこそばゆさに包まれる。耳たぶが真紅に染まり、膝がカクンと抜けおちた。

「さあ、もつと……見せつけてやろうか」

言葉づかいの変化に合わせて、声の高さがバリトンからバスに落ちる。快活そうだった口調が、獯猛な陰鬱さに乗つとられた。影公爵の体が風船のように膨れあがり、一張羅をビリビリに引きちぎっていく。これといって特徴のなかった青年は、いまもつとも危険な闇の化け物に変わっていた。

淫魔。

ただひたすら、ヒトの精気を吸いとるだけの異形の存在。

ヒトの精気を吸うには、ヒトを食べてしまえばよい。だから、彼らは長らくヒトを捕食し続けてきた。いわゆる「吸血鬼」は、淫魔の菜食主義者たちである。

だがヒト側の防衛力があがってくるにつれて、彼らは性交のさいに漏れだす精気を吸いとする戦術に変えた。そうすれば襲撃したいを秘密にできるし、また、くり返し吸いとすることもできる。餌の方でも抵抗せず、むしろ諸手をあげるどころか両足まで開いて迎えてくれる。かつては恐ろしい名で呼ばれていた彼らが「淫魔」と呼称されるようになったのも、この方針転換のせいだった。

『忍のいやらしい本性をな……』

本性を現した影公爵は、身の丈2メートルを超える奇怪な巨人だった。紫色で粘膜質な肉体のところどころを、象牙色で疣いぼだらけの表皮が、鎧のように包んでいる。どこを見まわしても毛らしいものはなく、紫色の粘膜はハチミツじみた体液で覆われている。

両足は獣の後脚みたいに、前に畳む造りだった。ウマと同じで、足首が異様に大きくなっていた。腰は洋ナシ形に膨らみ、寛骨と骨盤が肥大化して迫りだしている。その奇形のおかげで、股のあいだに2人座れるくらいの空洞ができていた。臍からしたの造りだけなら、皮を剥がれた有袋類と言っても通じそうだ。

腹部は細く、胸部に入ると急にボリュームを増す。特に両肩が大きく膨れあがって、西洋のお城のように並んでいる。尖塔じみた肩には口と思しき裂け目が無数に刻まれていて、さらに8対16本の腕が放射状に伸ばされている。腕とは言っても関節のようなものはない

らしく、どれも触手のように曲がりくねっていた。

首は恐ろしく長く、喉一面に蛇腹が走っている。その尖端に、ツノや毛髪を失ったメフイストフェレスのような顔が垂れていた。耳元まで裂けた口から涎を垂らし、闇そのものの瞳をせわしなく蠢かしている。

「……み、見せつけるなんて、そんな……でも、んあつ！ あああつ！」

忍はモンスターに引きよせられ、美身を半回転させられた。ブレザーを着たままの背中を、淫魔の湾曲した腹に預けさせられる。それまで胸や足を縛っていたへビたちが離れ、べつの手がしたから回って、膝の裏をグイッと抱えあげてきた。両足が折りたたまれ、真っ赤なハイヒールが宙を泳ぐ。タイトスカートがずりあげられて、ワイシャツの白い裾とショーツの黒い股布が顔を出した。

部分的に着乱れた女体を抱きかかえて、淫魔が跳躍する。高いフェンスをあっさり越え、と、屋上の縁に立った。吹きあげてくるビル風が、忍のネクタイと前髪をそよがせる。胴の底を冷気に舐められて、忍は短い悲鳴を漏らした。

自分のM字のしたに、50メートルを超える奈落がある。

遠近法の世界が、有無を言わず広がっている。大理石ふうの白壁とガラス窓の列が、線路のように続いている。5階あたりだろうか、まだ明かりの点いている部屋があった。都市の心電図よろしく明滅をくり返している信号機。食玩みたいなクルマ。豆粒の通行人。部屋のなかから見おろしているのとは、まったく違う景色だった。あまりにもリアルすぎ

て、かえって非現実感を覚えさせられる。自分が何故こんな状態に陥っているのか、本気であやふやになってくる。

「こんな……ま、街のどまんなか……ピルのうえで……お股を開いてるなんて……」

『嬉しいか、忍？』

忍は返答に窮した。この全身に走る震え、この妖しい興奮。肉の奥まで染みこんでくるざわめきは、身体の芯から湧きあがってくる昂りは、はたして歓喜なのだろうか？ 異常すぎる露出プレイをまえにして、自分は物も考えられないほど期待しているのだろうか。そこまで墮ちてしまったのだろうか。

黙りこくっている女の股間に、異形の腕が殺到してきた。ストッキングをつかみ、虫食いだらけに引きちぎる。蒸れていた内腿が、夜気を浴びて部分的に冷やされた。無数の穴にヌメヌメとした手や指が潜りこみ、残りの薄布を盛りあげる。火照った女肌を撫でまわし、熟れかけの太腿を捏ねあげる。

「……んあつ、んーっ！」

腿の裏と尻たぶの境界線、脂肉の繋ぎ目をなぞられる。むっちりと垂れた尻たぶを、色が変わるまで揉みたてられる。胴の底をドリブルの手つきでフタされた。真下へ伸びる3本指に、秘園の畝をかきあげられる。隠すのではなく淫靡に見せるためのレース地が、擦られて艶かしく囁いた。

様子見感の漂う愛撫でも、調教済みの忍には妙なる刺激だった。思わず上半身を跳ねお

こし、預けていた肩を浮かせる。軽い前のめりになったとき、地上50メートルの高さで両膝をつかまれているだけの、極めて不安定な状態にいることを再認識させられた。

「んーっ！」

落ちたら死ぬ。

どのような反駁も許されない死の恐怖に、股間をわしづかまれる。子宮が縮み、膣が震えあがる。そのどす黒い緊張感が、妙なる刺激を業火に変えた。恐れと悦びに挟まれて、意識が飛んでいきそうだった。まるで命綱にすがりつくように、忍は股間を撫であげてくる腕に抱きついた。

『ふふふ、自分から押しつけてくるのか』

「んんっ、だつて！ だつてえ！」

『だつて何だ？ ほら、早くも下着が濡れそぼっているぞ』

衣ずれがぬかるみの足音にかわっていた。自覚できるほどに膨れあがった小陰唇が、ぬるりとハミ出してきた。牝の匂いもあふれ出して、ビル風に舞いあげられる。せつかくキメてきたシャネル5番が、すべて上書きされてしまいそうだ。

「んーっ、どうしてえ！ どうしてっ、こんな……ああっ、こんなに感じるのお！」

割れ目をなぞっていた手が、ストッキングのシームに沿って下腹部をさかのぼり、ショーツの腹から潜りこんできた。生じたすき間に冷気が流れこんで、股間の昂りをいやというほど教えられる。

奴隸の身だしなみとして恥毛を剃られ、すべての障害物を取りはらわれている恥丘は、何の抵抗もせずに凌辱を受けられていた。淫魔の指が、勝手知ったる手つきで花卉をくつろげ、的確すぎるコースを描いて粘膜に刺さってくる。

『大洪水だな。今にも雨を降らせられそうだ……』

とろ火で煮こんだ肉料理のような胎内を、ゆつくりと掻きまわされた。肉壁の重なりを、ていねいに選りわけられて、足の付け根に甘い軋みが走る。たくしあげられたままのスカートが、うつとうしくてたまらない。

「んうっ！ うっ、うあ、ああっ！ 雨っ？ 雨つてえ……」

『これだけ股をビチャビチャにして、わからないのか？ この真下に、忍の愛液をぶちまけるんだよ……まだ少し人通りがあるから、うまく狙えば誰かを濡れネズミにできるぞ』

耳元で囁かれて、女課長はトロンとした目つきになった。

はるか彼方の通行人に、自分のいやらしいおツユを振りかける。あまりにも背徳的な行為だ。かつての自分なら、思うことすらできなかった破廉恥だ。

だけど。

今の自分は、影公爵さまの牝奴隷である。

だから、背徳的で破廉恥な行為をしても悪くない。そうするのがふつうなのだ。

「……ああ……なんて……なんていやらしい……」

『そう、いやらしいな。淫魔狩りを任とする神器省の、敏腕を謳われる課長さま……斬魔』

数歴代3位の鬼踊丸がするとは、到底思えぬ所行だ』

影公爵の聲が、抑圧の調子を強めてくる。プライドをじわじわと追いつめられて、調教されきった心身が逃げ道を求めてしまう。隷属させられるだけとわかっていながら、二度と引きかえせなくなるとわかっていながらも、肉悦を欲してしまう。

『しかも誅すべき敵……かつて死闘をくり広げた淫魔を相手にして、だからな……覚えてるか？ おまえはかつて、我が腕を9本も斬りおとしたのだぞ？』

「……はい……忍は以前、自分が牝犬であるとわからず……み、身の程知らずにもご主人さまに楯突いていました……」

『そうだ。御劔の名に恥じぬ、見事な刀嫁だった』

「……昔のことは……言わないでください……」

『またの名を「風神楽」だったかな？』

「……あああ、お願いです……もう言わないで……あつ！」

気持ちの良い髪を押さええられ、炙るようにくじられている。各関節から力が抜ける一方で、あちこちの筋肉が不自然に熱くなる。狂おしい気分させられる。

『そのやんごとなき戦姫が、淫魔の奴隷になって、部下を売りわたすスパイ行為を働き』

「……うう、言わないで……思いださせないでえ……」

『露出プレイで痴れ狂ったあげく、恥蜜の雨を降らせて通行人を穢す』

「言わないで！ お願い、言わないでえっ！」

『神器省にばれようものなら、お家がひっくり返る大スキャンダルだろうな』

「……ああ……ああ……」

自分はいけないことをしている。

「……ああ……ご、ごめんなさい……」

とても恥ずかしくて、いやらしくて、そのうえ自分のまわりにいる人たちを破滅させかねない大失態を犯しているのだ。湧きあがる破滅の思いが、忍を酸のように蝕む。つぶらな瞳が涙の膜に覆われ、瓜実形の頬が震えだす。

「……ごめんなさいっ！ 忍っ、いやらしくて……いやらしくてごめんなさいっ！」

御劔の娘として生まれ、鍛冶押かじ押しの規律に沿って生きてきた。

紅薙姫たちを束ねる家の後継者として、刀と縁組みした女たちの総代として、「女人ノ姿ヲ取りタル刀」らしくふるまってきた。刀は鳴かず、曇らず、ただ鋭く在るものだ。淫らを断ち、魔を斬り、闇を祓う神器だ。戦いのなかで毀れ、研ぎなおされ、再び戦っては研ぎなおされる。少しずつ己が身を磨りへらされて、いつかは折れる――。

神器省に奉職し、淫魔と闘い続けている紅薙姫は常に、凌辱の危機にさらされている。男の肉を喰らい、女の精を吸って生きている化け物どもの強姦は、女に生まれたことを後悔させられる阿鼻地獄だ。先輩、同僚、部下、何人もの姫が淫魔に犯され、躰られ、旧時の面影すらない色狂いに化していくさまを目にしてきた。彼女たちの不幸を哀しみ、あのように墮ちてはならぬと言いきかせてきた。そう自戒しつつも、彼女たちの恍惚とした表

情を忘れられなかった。

あの顔。

心ゆくまでいやらしい快楽を堪能した顔。

魂を嘖きださせているようなそれを、どうしても忘れられなかったのだ。

『ふふふ、いやらしい……変態め』

秘裂に潜った中指が、パワーシヨベルの動きを真似し始めた。膣道の天井を搔きだして、粘膜に浮きあがった血管を弾く。身体の内から尿道を圧迫し、恥骨を押しあげる。指の腹ですくいとつた蜜を、秘裂の外に穿りだす。

「んーっ！ んむっ、むーっ！」

女課長の全身に、たちまち汗が滲みだした。ワイシャツの襟が濡れ、剥きだされた胸の谷間にも小川が生じる。忍は自らを嬲る腕にますます抱きついて、いわゆるへっぴり腰じみたポーズになっていた。突きだされている美尻に別の腕が近づき、小刻みに揺れる双丘をわしづかんでくる。餅を相手にしているみたいに、ギユムギユムと揉みたててくる。

『紅薙姫の名を穢す奴隷……見られたがりのマゾ女……』

「んーっ！ ど、奴隷！ 忍っ、忍はマゾ女あ！」

指の搔きだしが勢いを増し、聞くにたえない音を奏でます。尻たぶが真っ赤に色づき、揉まれて圧迫された部分が、逆に白く目だち始めていた。爪先がワイパーのように跳ねあがり、赤いエナメルが弧状の軌跡を描いた。

『そうだ、よく復唱できたな。まずは1回目のご褒美をやるう』

挟みうちにされて悶え狂う股間に、とどめの一撃が落とされた。膣を蜜まみれにさせている手が、掌をグッと沈ませて秘裂の端、クリトリスを包皮ごと押しつぶしてきた。

「……ひーっ！」

胴の底から電流がほとばしり、忍は内腿を激しく痙攣させた。足を思いきり振りあげて、M字を一瞬だけV字に変える。踵が落ちると同時に膣から蜜があふれ出し、ショーツの股布をずぶ濡れにした。

腰を這いあがつてくる生々しい波打ちが、着衣の裏地を強く意識させてくる。絶頂まで飛ばされたというのに、ブレザーやスカートを剥かれていないのがもどかしかった。裸にされたいわけではないが、服を着ていたくない。ふだんの自分を、神器省の女課長「御剣忍」を連想させるものは、できるだけ捨てさってしまいたい。

『イッたか……だが、雨雲となるには足りなかったようだな』

淫魔の腕が下着のサイドをつかみ、指の尖端でなぞる。貝類じみた異様な唇からのぞく歯が、布というには心許ないレースを易々と切りさいた。別の腕がネクタイを解き、ワイシャツのボタンを外して前をはだけさせる。ハイヒールを脱がせ、背後に放りなげる。ずり落ちかけていた眼鏡は逆に押しあげ、しつかりとかけ直させた。

「……ひああ……ひい……熱い……あそこが、んああ……あそこが熱い……」

喉元や腋窩や足指、身体の末端を夜風に舐められて、股座またもとの発狂ぶりがいよいよ顕著に

なつてくる。鼠蹊部の引きつりが止まらず、恥丘の疼きも引いてくれない。子宮がずり落ちてきそうで、膣が脂汗を流している。

何度か荒い吐息をこぼしているうちに、オムツじみた濡れぐあいのショーツが剥ぎとられ、女の秘密をさらけだされていた。幼女のように無毛の下腹、ヒクついている性器、そして何故か元気に蠢いている肛門。いやらしい肉の素顔が、イルミネーションの淡い光に照らされていた。

『まったく、手のかかる奴隷だな……今度は、もっと派手にイクんだぞ』

涙で曇る視界の隅に、いかにも魔の存在らしい身体変化が飛びこんでくる。肩に付いている裂け目のひとつが、血管のなかの赤血球のように流れてくる。指を突つこませたままの手甲まで降りてきて、そこでスツと沈む。手の厚みに埋もれてしまった魔性の唇は、次の瞬間、女課長を絶叫させていた。

「……ひいっ？ ひーっ！」

魔唇は手を貫通して、その所在地を掌に変えていたのだ。真下で健気に芽吹いていたクリトリスを、チュルリと吸いこんだのである。

「だめっ！ んーっ、それっ！ それだめえっ！」

粘膜の優しさを活かして包皮を痛みなく剥きおろし、根本まで舐つてくる。快感神経の塊を人外の巧みさで責められては、達するなと言うほうが無体だった。忍はあっけなく腰を跳ねあげて、わしづかまれている膝をガクガクと揺すりたてた。

「いッ、イク！ ひいッ、イクウッ！」

陰核の責めに呼応して、膣内の指も再び秘肉を浚<sup>しゅんせつ</sup>し始める。女課長が歯を食いしばるたびに秘唇と肛蕾が収縮し、水切りじみた音とともに愛液を噴きだす。

『……あまり出ないな。昨日搾りすぎたか』

忍は答えることすらできなかった。

何しろ掌の唇はクリトリスの付け根、陰核脚の股という忍の泣き所を責めたててくるし、指の先端にある魔唇も舌を伸ばして、膣のなかから秘壁を舐ってくるのだ。外と内から魔性の舌責めに挟まれて、身も世もなく泣くしかなかった。ふり乱される黒髪が額や頬に貼りついて、キャリアウーマンの顔をぞつとするほどの被虐美に彩った。

『やれやれ……もう少しサービスしてやるか』

別の腕が忍の腰をつかみ、背後に倒させる。両手首をつかみ、真上に万歳させる。ブラジャーをむしり取り、乳首の痼<sup>しじ</sup>りぐあいを露わにさせた。無防備な脇のしたにへビの指を這わせて、たまっている汗を舐りとった。

「ひーッ、イクッ！ わ、脇でイッチャウ……またイクウッ！」

さらに魔唇つきの手を造って、双乳を背後から握りつぶした。ツクシの先じみた乳首とタマゴ型の乳暈を異形の口でしゃぶり回しながら、荒つぽく揉みたてる。尻たぶにも同様の舐り揉みを加える。ストッキングの穴に指を潜らせ、ヌルヌルした蛇腹で足指のあいだをたんねんに擦りあげる。

「イツちゃう、どこでもイツちゃうっ！ ひいつ、止まらないっ！」

揉まれているのか舐められているのか、撫でられているのか吸われているのか、縛られているのかしゃぶられているのか。どこをどのようににされているのか分からない。全身のいたるところから、怒濤の快楽が押しよせてくる。人間相手では絶対に味わえない、魔の複数形に打ちのめされる。

「イツちゃうのが、止まらないっ！ ひーっ、イクッ！ イクウッ！」

ここがどこで自分が何なのか、あらゆる区切りが失せていった。女体のなかを吹きぬけていく業火に身を任せ、紅蓮姫として性交を禁じられていた時間を取りかえそうとするかのように、凄絶な昇天をくり返し続ける。膣内の指がひととき深く潜って、尖端から伸びる舌で子宮のなかを舐めまわしたとき、今夜最初のカタルシスが訪れた。

「……………ッ！」

忍は胎児のように全身を丸めようとして、虚しく挫折させられた。四肢をガクガクさせながら、頤を跳ねあげる。理知的なりムレス眼鏡の陰で、日本女性らしい目が獣の相を浮かべた。鼻のしたがり伸びきって、いつもの伶俐さからは想像もつかない色惚けた表情になっていた。醜く歪められた朱唇のすき間では、唾液にまみれた前歯が軋みをあげながら噛みあわされていた。

筋肉を走りぬけた痙攣が収まり、骨のように張りだしていた内腿が、やっと落ちつきを取りもどした。腰裏のこわばりや股間の息みが途切れて、忍はごく幼いころから躰られて



いる禁忌<sup>タブー</sup>を破ってしまった。27歳になる大人の女が、トイレに用立てられていない場所で、誰かにかけてしまうかもしれない高い所から、放尿を始めてしまったのだ。

「……んあ……あひ……ひああ……」

金色の温水が淫魔の掌に当たって、ジョボジョボと音を立てる。ためこまれていた体液は性器のまわりを少しだけ濡らし、はるかな眼下へと降っていった。星明かりにきらめく落下を、忍は線香花火でも見ているかのように追っていた。

「……ああ、おしっこ……こんな、こんなところでえ……おしっこしてる……」

アンモニア臭が、胸のなかで信じられないほどの解放感に変化する。排尿の快感がそれに生理的な裏づけを与えて、清らかに生きてきた女に倒錯の蜜を覚えこませる。屈伏と快楽を結びつけられてしまったように、「倒錯」も方程式の項に取り入れられていく。

『まあ、この高さだからな。地面に着くまでには冷やされ、忍のいやらしい匂いも抜けてしまうだろう。降ってきたのが愛液混じりの尿だと気づく者は、そういないはずだ』  
つまり、もしかしたらいるということだ。

「……ああ、あは、あひい……ひーっ！」

有能な者が必ず備えている想像力。可能性を探りだす嗅覚が、忍の正気を消しさつていった。手負いの獣めいた呻きをあげる女に、淫魔がそっと墮落の道標<sup>みちしるべ</sup>を示してくる。

『どうだ、忍……座りたいか？』

「座りたい！」

間髪入れぬ応答だった。

「す、座りたいっ！ 忍っ、座りたい！ ご主人さまのあそこに、すっ、座らせてっ！」  
万歳とM字開脚に固められた艷身が、紫と象牙色の化粧物に引きよせられる。ジェット  
コースターの座席めいた股座のうえで、シタバタを演じさせられる。

『だったら、忍の本音を聞かせてもらおうか』

「言うっ！ 忍、座らせてもらうためなら何でもしゃべる！」

女課長は粘膜に覆われた特等席を求めて、あさましい忠犬ぶりを発揮した。

『鷹城八雲について、忍の思うところを言ってみろ』

「や、八雲さんは……」

残りすくない理性をかき集めて、必死に言葉を紡ぐ。ふだんなら即座に、しかも演出効果まで付けて口に行けることが、いまは時間を喰ってしようがない。

「……ぶつきらぼうです……軍隊にいたせいか、男口調です……た、態度も……あまり女らしくありません……むしろ、女であることに、いらだっているようです……」

『具体的には？』

「……ほ、本人は……ぜったいにみ、認めませんが……む、胸の大きいことを……コンプレックスにしているようです」

『それは面白いな……続ける』

「八雲さんは……ま、負けるのが嫌いです……どれくらい嫌いかというと……以前、か、

かなり好き嫌いがあつたそうですが……食べ物に負けた気がするから、ぜんぶ食べられるように……直したそうです」

『……ふふふ、良いな。実に……実に楽しめそうな獲物だ』

「それから……ああ、それから……それからあ……」

尻の振りぐあいから、淫魔は限界に近いと判断したらしい。真つ赤な女体をゆつくりと下ろし、肉で造られたイスのまんなかを盛りあげた。紫色の瘤は天に向かつて伸び、イチジクと二五〇ミリリットル缶を合体させたような巨根を形づくった。女課長が子供じみた歓声をあげ、穴だらけのストッキングから飛びださせた爪先をふり乱す。

『後で詳しく聞くとして……よく働いたな、忍。さあ、ご褒美をやろう』

忍はコクコクと頷き、鼻を鳴らした。

『今日ががんばったから、忍に選ばせてやろう……前と後ろ、どちらがいい？』

嬉しい誤算を伝えられて、女課長の肛門が伸びちぢみをくり返す。徹底的に仕込まれてきた穴は、まるで自薦するかのように赤みがかつた皺を蠢かして、かすかに内臓の匂いを立ちのぼらせた。

「……し、忍は……忍は……」

前と後ろのどちらを選ぶかと問われたら、ふつうは前だろう。いきなりお尻の穴に入れられたがる女なんて、まずいはずだ。しかも、指や舌でほぐしてもらってすらいない。何の支度もなしにアナルⅡセックスするなんて狂っている。

そう思うのだけれど、お尻が何かを訴えている。恨めしげに嘯き続けている。

街のどまんなかで小便を振りまいたくせに、いまさら「狂っている」だのと口にできるのか。むしろ自分は、そういうことをこそ望んでいたのではないか？ ふしだらなことをしたい、禁忌を犯したい。刀のように生きてきた裏で、そつと眩いていたのではなかったか？ そうした影の欲望が宿りうるのは、やはり陰の巣であるはずだ。

自己管理の権化だった自分が斬りすてた、もう1人の自分。失われた半身が棲むのは、お尻の穴だ。あそこには、「御劔忍」になれなかった忍がいる。

「……お……お尻っ！ お尻の穴がいい！」

倒錯のおねだりを告げる口調は、不自然にあどけなかった。

「お尻い！ 忍っ、しゃ、シャドウさまをつ、お尻の穴でお迎えしたい」

「入れるだけでいいのか？」

「違うっ！ それだけじゃいやっ！」

「ほう、ではどうして欲しいんだ？」

「う、動いて欲しい！ 動いて、ズンズンって突いて欲しい！ そしてそして……」

忍はとっておきの媚びを滲ませて叫んだ。

「……ご主人さまの精を飲ませて欲しいっ！」

「まったく、欲張りな奴隷だな……」

聞きわけのない子供をまえにした父親のため息をついて、淫魔は忍の拘束を緩めた。万

歳M字の格好を少し崩しながら、生白い美身が肛虐のイスに着席した。

「……ひいっ！」

よほど開発されているのだろう。忍の尻蓄は、かなりの巨根を難なく受け入れ、一息に呑みこんでいた。「もう1人の自分」を串刺された女は、新たな骨を通されたかのように背筋を伸ばし、頤を震わせて天を仰いだ。開けはなたれたままの口から、濁った涎がダラダラと垂れていった。

「刺さってるっ！」

自由になった両膝を揺らし、両手でバンバンと座板、つまり淫魔の広い恥骨を叩く。

「おっ、奥う！ ひいっ、こんな深いところまで刺さって……ひいっ！」

遠目に見るなら、「幼女が胡座あぐらのうえで暴れている姿」に見えなくもなかった。ひさしぶりに田舎のお祖父ちゃんと会った孫娘が、その尻を祖父の膝と膝のあいだに、その背を祖父の腹に預けて、甘え半分の癩癩を起こしているのだ。

「イク！ ひいっ、イクッ！ イクウウッ！」

いくら暴れても、腸の奥深くまで届いている男根のおかげで、イスからずり落ちることはない。むしろ暴れば暴れるほど、肉壁を擦られてけたたましい喜悦を覚えられる。釘付けられている安心感に満たされる。

女課長は顎の裏までさらして、黒髪の貼りついた上半身を淫魔の腹に預けた。ときおり電気じかけの素早さで起きあがり、「イクッ！」と叫んでは大粒の涙をまきちらす。小ぶ

りの双乳を揺らして、痲りきつた乳首の先から汗を飛ばす。イスの肘かけというには遠く、高い位置にある寛骨をつかんで、奥歯をギリギリと噛みあわせる。

『ふふふ、凄い悦びようだな？ どうやら、これだけでも充分そ……』

「……だめえっ！」

髪を振りみだしての即答は、鬼気迫るものがあつた。

「動いて！ 動いて動いて動いてっ！」上を見あげて、絶叫する。「し、忍のお尻っ！ いやらしい忍の悪い口を突きあげてえっ！ ズンって！ ズンズン罰してえ！」

湾曲した首の先、高速道路向けの電灯のように、淫魔の顔が笑っていた。その背後には、魂を吸いこんでいきそうな星空が広がっていた。夏の大三角形が、絵葉書じみた美しさできらめいていた。

『わかつたわかつた……ふふっ、せっかくここまで来たのだからな。今夜は、とびきりの座り心地を味わわせてやろう』

淫魔は4本の腕を伸ばし、忍の腰と肩を押さえつけた。4点シートじみた拘束を施すと、いきなり、屋上から身を投げた。爪先を中心に、忍もろとも半回転。上下がひっくり返され、全身が浮遊感に包みこまれた。

「……ひ……ッ！」

視界が夜空からアスファルトに変わった。下半分には、御桜銀行の白壁と窓ガラスの枕木が広がっていた。風が頬を擦りぬける。髪の毛のたなびく音がする。汗が肌を舐めていき、

ついには乾燥し始める。

落ちていく。

この街でいちばん高い場所から、自分の尿をバラまいてしまった地面に向けて、引力の手に引かれている。お尻の穴に男根を刺されたまま、飛びおり自殺に巻きこまれている。

窓ガラスの流れが速度を増していた。夜風が刃になってきた。景色の変化に脳の処理が追いつかなくなつて、視野の縁がぼんやりとにじみ出す。ジェットコースターやフリーフォールでは味わえない重力の絶対性。喉が潰され、腹が冷える。体温が下がっていく分、尻穴の男根が熱く感じられた。1秒が長かった。時間のタガが外れたのかもしれない。今何階くらいの高さなんだろう、何階くらいの高さだったんだろう、あとどれくらいで地面に激突するのだろうか？

死の恐怖にとり憑かれて叫びかけた瞬間、淫魔が無数の腕をパラシュートのように広げ、両足をのばした。流れていく壁を蹴りつけて、向かいのビルめがけて斜めに跳んだ。

「……………ッ！」

身体がイスに押しつけられる。男根が腸の奥まで突きささってくる。ウソ臭いくらいの乱暴さが、そもそも非現実的な状況にある今はたまたま甘美だった。死ぬまえに最後の楽しみを貪つておこうとでもいうかのように、腸壁が信じられない敏さを閃かせる。

「……………イクッ！」

瞬間的で、けたたましいエクスタシー。はたして、本当に声を出していたのかはわから

ない。舌の痺れが抜けていくと、目の前はキットカットだった。御桜のライバル、サクラ信用金庫本店。わざと古色を帯びさせた壁に、淫魔のデカイ足が着地する。膝を奥に引いて足を畳み、反対側に向かって跳ねる。ベクトルが獯猛に宙返りする。

「いッ！ い……」

腸の粘膜を、これでもかと掻きまわされた。

「……イクウ！」

さきほどの倍は鋭い刺激が、体の管を走りぬける。尻の穴が燃える。景色がめまぐるしく変化して、酩酊感に襲われる。また御桜銀行に戻ってきた。予想していた通り、淫魔は再び対岸に向かって跳んだ。

「ひいっ、ひいっ！ す、すごい！ すごいっ！」

落下の速度を少しずつ殺しながら、淫魔は2つのビルをジグザグに行き来し続ける。どんな絶叫マシンでもありえない、究極の落下運動を描き続ける。斜めの向きが切りかわるたびに、忍は尻の肉穴をこれでもかとえぐられた。ついでに子宮まで蹴りとばされた。2つの急所がピンボールのように、絶頂をはね返し続けた。

「イクッ！ ひいっ、イクウ！ ひい……」

音が聞こえない。風の流れが感じられない。明かりの点いている階を通りすぎた。ネクタイを緩め、ボールペンの尻をくわえている残業マンと目が合った。コンマ1秒にも満たないはずの時間が、手触りすらともなって実感できた。

「……………う」

ひさしぶり、だった。

この感覚を外から押しつけられるのは、実に3年ぶりだった。

妖しい熱が、一人では掘りえぬ深さまで潜りこみ、自慰ではかすりさえしなかった鉦脈を覚醒めさせてくる。そこから湧きあがる疼きは、自分の指やシャワーで創りだすモノとは違って、たつぷりとスパイスが効いていた。

八雲は、迷った。

間髪入れずヤツに襲うか、それとも、この昂りが鎮まるまで待つか。

(……………)

唾男爵は、もはやたいして動けまい。こちらから積極的に仕掛けなくても、危険はなさそうである。むしろ、こうして逡巡しているだけでもヤツは出血し続け、確実に弱っていく。労せずして勝ちをたぐり寄せられる。

気が付けば、八雲が拳げているのは「待ち」の論理ばかりだった。襲うかどうかと迷っているのではなく、自分に対して「なぜ待つべきなのか」と言い訳し続けている。何のことはない、自分は待ちたがっているのだ。そして3年ぶりの――。

思考の先を、紅薙姫は捻じきって捨てた。

まるで勢子に追いたてられた獣のように、墓石の陰から飛びだしていた。

握りなおした斬魔刀を肩の高さにかまえ、女体が捻転するさいの曲線美を月光に煙らせ

ながら、距離を詰める。行く手を遮る卒塔婆を蹴りとばし、ヤツの頂きに刀を突きたてるシーンを思いうかべて跳躍した。

突然、背に打撃を受けた。

後ろから、何かを投げつけられた。

(……………えっ?)

硬さや重さからいって、おそらくは御影石の塊、つまり墓の破片だろう。ダメージそのものは念装甲膜が吸収してくれたものの、外力を加えられて身体を泳がされてしまった。八雲は大きく軌道を逸らされ、必殺の一撃を無防備な飛びだしに変えられていた。慌てて足の親指に重心を乗せたと、その両腕に触手が絡みついてきたのとは、ほぼ同時の出来事だった。

(こ、こいつ! いつこんな罠を…………)

いくら焦っていたとはいえ、周辺の安全確認まで怠ってはいない。軍人あがりの八雲にとつて、それはほぼ本能なのだ。また、ヤツの死にかけっぷりからいって、そのような肉体的、時間的余力もなかったはずである。八雲の気取りうる範囲外から、そこそこ重い石の塊を、かなりの速さと威力で、素早く動いていた標的やぐもに当てる――。

ありえない。

もしかして、もう一匹潜んでいたのか? だったら初めから共闘しているはずだし、そもそも「淫魔たちのコンビネーション」というモノじたいが考えにくい。ヤツらは万人狼

の利己主義者であつて、たがいに足を引っぱりあうことはあつても協力はしない。

どうやったのだ？

ありえない、考えられない。しかし、現実にかうして――。

うろたえているうちに巻きつかれ、両腕を万歳のポーズに引きあげられる。そのまま身体を持ちあげられ、そばにあつた墓石に押しつけられた。墓を後ろ手に抱えこんでいるよな格好に固められ、線香立てのうえに座らせられる。背中に「鈴木家之墓」という彫りこみが伝わり、両の脇腹あたりで萎れた花束が揺らいだ。

「……く……うっ！」

「へへっ、らしくないミスだつたなア……」

前膊ぜんはくに巻きついていた触手が、その身を滑らせてくる。生きている捕縛術と化して、八雲の両頬に粘液の温度を、鼻にネットリとした臭いを塗りつけてくる。二の腕にも絡みつき、脇のしたからニュツと飛びだした。固く引きむすばれた紫唇のままで、触手の先端をバツと広げてみせる。クラゲ状の肉傘が、ぬめりたつぷりに波打っている。

「……何があつたかわからねえが」

自分で仕掛けてきたくせに、何を言っているのだろう。

「へへへ、たつぷりとお返しさせてもらおうかねエ……」

肉傘の内側はビッシリと疣が生えていて、まるでミミズで作られたジュウタンだった。腐りかけのレバーめいた色合いをした突起は、どれも視神経にやかましく蠢き、粘液を飛

びちらかせている。しかもその1匹1匹に意志のようなものがあるらしく、ウジャウジャの大群は各々勝手にのたうち、伸び縮みをくり返している。

「……………」

肉鉢の底、触手の蛇腹に繋がっている暗い穴から、平べったい舌が伸びてきた。舌の表皮は縮れた臓物のように、皺と襞で覆いつくされていた。所々に幼虫の気門めいた穴があつて、粘液を吹いたり吸ったりしていた。

『おい、そう見つめるなよ……それともアレか、ひよつとして期待しているのか?』

「な……なんだ……と……」

『あんたは、コイツの味を知っているしなア』

「……ち、違う!」

異形ぶりを見せつけていたクラゲが、いったんその傘を閉じ、咲くまぎわの蕾よろしく膨らんだ。一拍を挟んで内から弾け、溜めこんでいた粘液を降らせてきた。

胴体のなかで最も高く突きだしている丘が、局地的な雨を浴びせられる。まるで中華丼にかけられた餡のように、ヤツの毒液が胸を覆い、谷間や脇を流れおちた。うつすらと見える腹筋に沿って滴り、腰当の狭間を通って下腹まで滑りおちた。念装甲膜越しに独特のヌメリが伝わってきて、八雲はひそかにうなじを逆立てていた。

『さつき、その巨乳に媚液が当たってたよなア……ああ、それで疼いちまったんだな? だから、あんなへマ踏んだのかア』

「違っ！」

間髪入れず叫びかえしたものの、動揺の影を払拭することはできなかった。「もしかしたら」と、想像力が要らぬ可能性を示してくる。もしかしたら、ひさしぶりに押しつけられた性感を――。

「お、おまえが！ おまえが墓石を……」

淫魔よりも自分に言いきかせるつもりで叫んでいると、とつぜん、魔性の唾液が滴ったあたりから白煙が立ちのぼり始めた。そのしたから現れたものを見て、紅薙姫は密かに驚きの声を漏らしていた。

「……へへっ、オレの体液は酸にもなるんだよ……安心しな、あんたらの肌を溶かしたりはしねえからよ」

褐色一色だったはずの隆起に、真っ白な虫食い穴が生じている。腐蝕地は広がり続け、唾液の流れた軌跡に沿ってタテ長の穴を作った。2つの裂け目を内から捲りあげて、押さえこまれていた双乳が転びだしてくる。「まろぶ」という文語的な表現が似つかわしい、生命の躍動感さえ孕んだ登場だった。

「……うお、これは」それまで饒舌だった淫魔が、言葉を失っていた。「こ、こいつは……これは……」

「み、見るな……」

「……これは、スゴいな……これほどとはな……」



「……………く……………」

『……ホントに……こんなスゲえ乳があるんだなア……』

根本を縊りあげられ、常より張りつめさせられたふくらみは、女の象徴と呼ばれるに値する存在感を訴えていた。闇のなかでもくつきりと輝いて見える白さは、人魂にまちがえられそうなほどであり、身動きするたび揺れる様子は、あたかも独立した人格すら秘めていそうだった。

挑発的な高さにある乳暈は、雅な香りのする赤紫色で、丸い眼鏡レンズぐらいの広がりを見せている。その中心に鎮座する乳首は、途中で千切られたかのように陥没していた。魚の唇めいた中途半端な突きだしぶりは、醜いわけではないが微妙に野暮つたくて、アートの住人になれそうな双娘をグラビアの見せ物に押しとどめていた。

『へえ、乳首は土台と違って、慎ましいじゃねえか？』

「……………」

『でも、これが本性ってわけじゃなさそうだな……奥に詰まってるんだろ？』

八雲は黙って、すべらかな頬に朱を走らせた。

その平らすぎる姿、聴診器の先めいた有り様は、確かに本来のものではなかった。物言いたげな紫唇を思わせる亀裂の奥には、平均よりもやや大きい肉芽が隠されているのだ。天然のニプレスに守られた本身は、八雲が極度に昂奮したときだけ、ニョッキリと芽吹く。自衛軍時代の恋人からは、「八雲さんの『欲情度』を教えてくれるパロメーターです」と、

甘やかにからかわれたものである。

だが、それも3年以上まえの話だ。

強姦事件からこの方、八雲の乳首は一度も勃ちあがっていないかった。紅薙姫に許された唯一の慰め方では、胸の先が疼くほどの昂奮など望むべくもなかったのだ。

あの夏、淫魔にまる一日じゅう、ホントに24時間ぶっ続けでシヤブリ続けられ、クリトリスなみの感度に開発されてしまった性感帯は、それ以来ずっと、乳暈の奥に引きこもり続けているのである。

『へへっ、オレが眠り姫を起こしてやるよ……』

唾男爵が再び、触手の開口部を膨らませてきた。くす玉の趣で割りひらき、卵白もどきを垂らしてきた。今度はだいぶ粘っていて、銀色の糸を引いていた。糸が1本切れるごとに、鼻腔を爛れさせそうな異臭が立ちのぼってきた。

(……媚液だ)

息を止めて、腹筋に力を込める。

臭いだけでも子宮を疼かせるという強力な催淫薬。肌に塗りつけられたら半日近く狂わされ、粘膜に擦りこまれようものならそれだけで絶頂に翔ばされるという。女殺しの魔液がアメーバじみた生き物つぼみさを見せて、胸を覆いつくしてきた。

一瞬、ひやりとさせられた。

別の温度に包まれた違和感と、まるで舌でも這わせられているかのようなネットリとし

た触感が、眉間に皺を刻ませる。双乳の肌が空気を感じられなくなって、軽い酸欠のような心もとなさにとり憑かれる。

『……へへへ……たっぷりとサービスしてやったからなア』

粘液の端が、ついに乳肉の付け根にまで達した。その瞬間、まるで掌を返したように柔肌が熱を持った。

「……………ッ！」

熱くなるどころの話ではなかった。煮えたぎっていた。ドロドロの粘液の裏側で、化学反応が起きているとしか思えなかった。紅薙姫は眉を八の字に下げ、思いきり奥歯を噛んだ。頬に筋肉の震えが浮きあがり、長めの前髪がサラサラと音を立てた。

『どうだ、効いてきただろ？』

「く……………うっ！」

『いいなア、その反抗的な目つき……白目の獐猛な輝き……オレたち淫魔を心の底から憎んでいるのがよくわかるぜ。でも……』

妖しい熱が、じわじわと浸透してくる。肉房じたいがひとまわり近く大きくなり、あちこちに静脈の青筋が浮かびだす。乳暈がやかましいくらいに張りつめて、ふだんならおくびにも現れない厚みを訴え始める。

『……くるだろ？ へへっ、くるんだろ……キチまうんだよなア？』

皮膚の毛穴に、無数の羽虫が潜りこんできているようだ。熱を誘う羽ばたきが、脂肉を

小刻みにかき混ぜてくる。釣り鐘でたとえるならベロのあるあたりから、低い唸り声に似た何か湧きあがってくる。

「……………くう……………う……………んッ……………」

内なる唸りを忌避しているかのように、乳首がゆつくりと盛りあがってくる。潰れたままだった粘膜の背伸びが、胸に溜まっている熱を忘れかけていた色に染めてくる。

『胸の奥がジクジクいつてるだろ？ 菌が浮きあがりそうだろ？』

自分でコントロールした悦びではない。飼いならされていけない。オナニーでは決して味わえない獐猛さが、官能の眠り姫をひそやかに爪弾いてくる。なかんずくコンプレックスの塊を発信源にされてしまったことが、八雲の動揺を誘っていた。

「……………黙れ」

ともすればギョッとつぶつてしまいそうになる臉をこじ開け、濡れた視線を放つ。

『そうそう、そうこなくっちゃなア！』

両腕に絡みついていた触手が、ゆつくりと這ってきた。脇のしたを押さえられ、双乳の横をなぞられ、下乳の付け根に巻きつかれる。逆さの「？」を描かれて、肉球をふわつと持ちあげられた。

「……………ッ！」

ほんのちよつと揺すられただけなのに、それは平手打ちよりも鋭い衝撃を伝えてきた。ブーツのなかで、足の指が音を立てて丸まっていた。

(……お、おかしい！ ……こんなの、おかしすぎるっ！ ああ、どうして！)

八雲は肩をすくめて生唾を飲みこみ、力いっぱい瞬きをくり返した。下唇のおのきを押しころして、両手を握りしめる。

「どうされました、八雲姫？」

シヤドウが声を忍ばせて笑っている。

「……絶対に……殺してやる……」

「ふふふ、お待ちしていますよ」

女性的な手が、黒の帽子と紫の輪に挟まれた白い象徴を持ちあげてくる。割と大きな手だったが、八雲のそれもまた規格外である。たつぷりとしたものが、指の股から溢れでた。溢りだされたせいでほんの少しだけ垂れた下乳をつかまれ、ふわりと浮かされた。

(……こ、こいつの手！ ……手、手も……ッ！)

淫魔たちにとってのヒト型は、もちろん擬態だ。この肌に触れてきている指も、首筋に吐息を吐きかけている顔も、一皮剥けばどれほどグロテスクな異形になるか知れたものではない。本質的には触手と同じなのだが、それでも人間的な、親しみやすい形態になっているがゆえの丸さはある。

「……う、く……あ……う、は……」

あるはずなのだ。

「姫、まだ触れただけですよ？」

八雲はすでに、鎖骨のくぼみに汗を溜めていた。顔面ぜんたいを拍動させていた。

「……つく……ゲスめ……」

「ええ、だつてチンケな下っ端ですからね」

シャドウは女の塊を中央に寄せると、10本の指をやにわにめり込ませてきた。親指以外が双乳の量感を押しあげ、親指がそれを尖端へ送りこむように押しさげてきた。

「……………ッ！」

情けないことに頬が引きつった。

「う、あつ！」

掌に囚われたかのように、視界がぐにやりと歪んでいた。指の力を抜かれて乳房が元の紡錘形に戻っていくあいだ、全身の筋肉が砂糖菓子に変わってしまったようだった。八雲の薄い唇から甘い吐息が漏れ続ける。それが切れたところを見計らつて、シャドウは再び、さらに激しく揉みこんできた。

「あつ！ ああつ！」

胸板のうえに乗っているものを弄られているだけだ。肩こりとコンプレックスの源を歪められているだけなのだ。それなのに、揉みこみに合わせて喘ぎが漏れてしまう。背筋が反り、脇腹に震えが走る。

「ふふっ、これだけで感じていただけるとは……本当に寂しがり屋の胸ですわね」

淫魔の手戯はリズムミカルになり、各指ごとの力加減を調節し、さらには各関節の屈曲に

もヴァリエーションを取りいれて、汗まみれになったふくらみを抽象芸術よろしく変形させてきた。そのうえ付け根を縊っている触手も伸縮をくり返し始め、乳房そのものが充血と弛緩のビートに支配されてしまう。

(……に、憎め……怒れ……な、流されるなっ！)

そこまで弄ばれているのにブラジャーは残されたままで、荒海の救命ボートみたいに浮きずみさせられている。なぜ脱がさないのかと訝しむ気持ちは、すぐに霧散させられた。これもまた、責めのテクニクなのだ。

真っ黒なレース地は、ほんのり色づいた雪肌のうえだと悪目立ちして、またその縫い目でもって尖端をヤスリがけしてくる。自分がどれだけ揉まれているのかを、視覚と触覚の両面で思いしらせる疫病神になっている。

「ああっ、く……くうっ！　ん、くふあッ！」

ズクンズクン、と双乳が喚く。育ちすぎた双娘が、意識のすべてを乗っとり始める。知らず知らずのうちに足を引きよせ、踵と太股を密着させていた。ハイヒールの冷たさに接して初めて、自分がそのような動作を取っていたことに気づいた。

「……あつ、あつあつあつ！　……か、か……」

ぽつりと眩きが漏れたのは、自分を鼓舞するためだったと思いたい。

「……か、感じてない」紅薙姫は、真っ白な前歯をさらしながら首を振った。「感じてない……感じて、なんか……」

「そうですか、まだ物足りないと仰られますか」

ヌルヌルと新手の触手が伸びてくる。

「……あ、うあ……あっ！」

2匹は真っ赤になった左右の耳殻をなぞり、震える顎の骨を越えて首筋を這いおりてきた。いやらしい粘着感とおぞましい訴求力とを改めて知らしめ、鎖骨の汗を拭い落とし、縊りあげの触手と直交して、ブラの領地に踏みいつてきた。

「あっ！ やめ……」

「おや、どうしました？」

「……………」

「まだ感じたりないのでしよう、八雲姫？」

「……た、足りるものにも……感じてない……」

「そうでしょうとも。ですから、もつと激しくいたしますね」

「……うあ……や……や、め……」

アスパラガスの太さをした先端が、レース越しに乳首を舐りあげてきた。

「……あああっ！」

八雲は素のままの嬌声を噴きあげていた。

「やっと感じていただけたようですね？」

こらえきれなかったことに歯ぎしりして、腹筋を息ませる。腰の裏が震えていて、内腿

が燃えているように熱い。頭に昇ってきた血が退きはじめたところで、再度舐りあげられた。先ほどより力が込められていたせいかな、ブラジャーをズリあげられていた。

「ああ、感じてない！ 感じてないっ！」

上半身ぜんたいで暴れたため、三度目の正直を受けてついに、ブラジャーが脱げてしまった。しわくच्याにまとめられた黒布のしたから、厚ぼったく腫れた乳暈と親指と見まごう乳首が現れる。噴火口さながらの充血ぶりに粘液のてかりをつけた姿は、八雲じしん正視できぬほどのいやらしさだった。思わず目を背けてしまうのを待っていたかのごとく、触手が尖りの根本に巻きついてきた。

「感じてな……あーっ！」

淫魔たちの触手に縛られるのは、つまるところ舐め続けられるのと同じである。あるいは擦り続けられる、揉み続けられると言ってもいい。そのすべてを味わわされるとい方が、実状を反映しているかもしれない。

「あーっ、あーっ！」

不意を突いて集中豪雨を降らされては、ひとたまりもなかった。だいいち、しばらく尖端ばかりに気を取られていたが、双乳ぜんたいの揉みこみも付け根の縊りだしも、ずっと進行形なのだ。快感の堤防は、爆ぜる契機を待っていたのである。

「ふふふ、ご満足いただけているようで……」

異形のへびたちが脂肪を送りこみ、魔性の手がいやらしく味付けて振りわけ、触手のリ



ングがそれを吸いよせて凝集させる。八雲の主観的な表現を使うなら、プラズマを飛ばすほど帯電した針が、乳首の芯に突きささってくるようなものだった。しかもその針は、乳房のなかに達すると稲妻化して乳房ぜんたいを感電させ、さらには全身のすみずみまで奔りぬけていくのである。

胸の先を縛られているだけに手足の関節まで痺れが走る。3種の責めが絶妙の連携を見せた一瞬には、思わず爪先を振りあげてしまった。左のハイヒールが脱げて宙を飛び、床のうえに転がった。

「ああっ、や、やめろっ！ やめ……」

このまま続けられたら、絶対にたどり着きたくない高みにまで運ばれてしまう。

憎き淫魔の手によつて、コンプレックスの塊を刺激されて「それ」に至るなんて、死にたくなるほどの屈辱だ。なにがなんでも避けたいという焦りが、涎に飾られ始めた紫唇に哀願調の喚きを噴きださせてしまう。

「……これは……ひよつとして、いける、か？」

揉みこみの指が、双乳のもつとも疼くところに食いこんできた。触手の先端が、縛り首にされた肉芽をしたから弾きあげてきた。

「……………ッ！」

淫魔に対する憎悪も、この状況におかれた屈辱も忘れた。自分がいまどのような痴態をさらしているか、という気がかりも掻ききえていた。3年ぶりの強力な閃光が双乳からほ

とばしり、心身を焼きつくした。紅薙姫の魂鋼に「女」の紋を浮かびあがらせた。

「……あ……うあ、あ……」

唾男爵に犯られかけたときとは違う。本気で、掛け値なしに、疑いようもなく昇らされてしまった。全身のコントロールを奪いとられ、時間の流れを見失うまで放りあげられてしまったのだ。身体の芯が噴きあがるときの、あの狂おしい刹那。そこから一気に押しながされる無力感の手応え。その先に待ちうける絶対的な「女」の満喫。

絶頂感――。

「……あああ……ああ……」

まだ続いている腰のピクつきが、他人の所作に思えてしまう。内腿の熱さが、いつのまにか粘っこい湿り気に変わっていた。今となつては、わざわざ手で扇ぎたてられなくてもわかる。股間の匂いを自覚できる。

「……下ごしらえしておいたとはいえ、この段階で」恍惚にたゆたう八雲を冷静に検分しながら、「これほどたやすくイカせられるとはな」

シャドウがそれまでとは打ってかわって低い声で呟いてくる。

「秘めたマゾ性の強さもあるが……それよりも影響を与えているのは、こちら側のアドバンテージだな。初めて躡る女体とは思えないほど、性感を読みとれる……乳の弱みを見抜ける。触っただけで肉のすすり泣きが聞こえてくるとはな。実に愉しいが……」訝しむように独りごちていたが、「まあ、運命の出会いということにしておくか……ふふふ、姫。

大絶叫でしたね」

「……うあ、あ……ああ……」

「俗に『吼える女は深情け』と言いますけれど、八雲姫もその口みたいですね」

「……あああ……ああ……」

「なにしろ、ちよつと胸を弄られただけで……ですからねえ」

やつと肩の震えと腰の揺れが止まった。八雲は放心していたことを恥じるように顔を歪ませ、好き放題言っているシャドウを睨みつける。左の目尻が溢れ、ホクロをなぞるように熱いものが垂れおちていった。本人は怒りを表明しているつもりなのだが、傍から見れば幼女の拗ね気には見えなかった。

「ここまで……16分ですか」

信じられなかった。

（……た、たった？ まだそれしか経ってないのか……）

こいつが宣告してきたとおりのスケジュールなら、あと7回以上は精を遣らされてしまう計算になる。いや、それならまだいい。こいつら淫魔の辞書に、はたして「制限時間」などという品詞が載っているだろうか。このまま夜明けまで犯され続けてしまうのではないか。数えるのが馬鹿らしくなるほど昇らされてしまうのでは――。

「さて、あと何回かわいい絶叫を拝聴させていただけるのでしょうか」

「……か……かわいい……？」

「姫の叫び声には、振りきれまいとする必死さが滲みだしているんですよ。なんとかとり繕おうとしている足掻きぶりが、実に健気で……『復讐鬼』なんて物騒なあだ名を付けてしまつてすみませんでしたね。仲間たちに代わつて懺悔します」

八雲の呻きを柳に風と受けながし、淫魔が胸責めを再開させてくる。ただしもつとも騒がしく蠢いていた両手はふくらみから離れて、脇腹を撫でおろし、腰骨をくすぐり、足の付け根をなぞつてきた。

(……なにが……懺悔だ！)

八雲は首を振つて流れる涙を振りはらい、わななく下唇を噛みしめた。仇敵に絶頂をさらしてしまった悔しさと恥ずかしさで、視界の端が赤く染まっている。脳を巡る血の轟音が聞こえてきそうだ。ふざけるな。かわいい声など、二度と聞かせてやるものか。

黙りこんだ復讐鬼を驚かそうというのか、それまで紳士面していた両手がオオカミの本質を剥きだして、ストッキングを荒々しく引きさいてくる。ショーツの部分が外気に当てられて、いやがうえにも股間の綻びぐあいを自覚させられた。

「どうやら、姫は濡れやすい体質なんですね。恥丘の膨れっぷりも凄いですし……あそこが力こぶを作っているみたいですよ」

「……………」

「小さいショーツということもありますが、股間にぴっちり張りついて……花びらのかたちや割れ目の長さまで、まるわかりです」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



電子書籍も配信中!

## ドリームガーデン

2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



大人気PCゲームのコミック多数連載!



## コミック UNREAL

## ヒロインピンチDX

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。